

『世界年代記』における 「マタモロス」聖ヤコブと「ヒスパニア」

田辺 加恵

La imagen de Santiago Matamoros e Hispania en el *Chronicon Mundi*

Kae Tanabe

Entre las imagenes iconográficas del apóstol Santiago la que más se prodiga en España sería la ecuestre, o sea, la de Matamoros. Esta imagen tiene origen en el “Voto de Santiago”, inventado probablemente por el canónigo de la iglesia de Santiago del siglo XII, Pedro Marcio. En el Voto se cuenta que el santo acudió, montado en un caballo blanco con una bandera blanca en la mano, al campo de batalla llamado Clavijo, en ayuda del monarca cristiano, Ramiro I. Con la intervención de Santiago, el rey consiguió la victoria contra los musulmanes y prometió, que toda la *Hispania* hiciera la donación generosa y perpetua anualmente a la iglesia de Santiago, en agradecimiento a la ayuda recibida del santo.

El autor del *Chronicon mundi* (siglo XIII), Lucas de Tuy, diácono del monasterio de San Isidoro de León, utilizó el Voto como una de las fuentes para su crónica, y en breve tiempo esta obra la usaría como fuente el arzobispo toledano Jimenéz de Rada cuando compiló *De rebus Hispaniae* (siglo XIII), considerada como una de las “historias oficiales”.

En la parte citada del *Chronicon mundi* Lucas mantiene o más bien enfatiza el carácter del “santo de *miles Christi*” de combatir contra los musulmanes. Sin embargo, nunca alude a la palabra *Hispania*, al hablar de una ofrenda anual otorgada a la iglesia de Santiago. El artículo intenta analizar la razón por la que se debilita el patronato hispano de Santiago en la crónica del Tudense.

キーワード：スペイン中世，聖ヤコブ，マタモロス，『世界年代記』，「ヒスパニア」

1. はじめに

スペイン北西部にあるサンティアゴ・デ・コンポステラ Santiago de Compostela の町には、キリスト十二使徒の一人である聖ヤコブ（スペイン語ではサンティアゴ Santiago と呼ばれる）が眠るとされる。9世紀にこの地で聖人の遺骸が「発見」されて以来、スペインでは聖ヤコブ崇敬が高まり、聖ヤコブは数多くの絵画や彫像のテーマとなってきた。聖ヤコブの図像パ

ターンとしては、主に使徒、巡礼者、「マタモロス Matamoros」の3つがある。この中で最も古いのは使徒としての像であるが、巡礼が盛んになるにつれ、巡礼者を守護する側であった聖ヤコブ自身が巡礼者の姿をとるようになった。3つ目の「マタモロス」とは、白馬にまたがった聖ヤコブの像のことで、剣を振り上げて今まさにイスラーム教徒を駆逐しようとする姿で表される。これは、12世紀に作成された「聖ヤコブ誓約 Voto de Santiago」中に描かれている聖ヤコブの姿に端を発する¹⁾。

「聖ヤコブ誓約」は、クラビホ Clavijo の戦いでイスラーム教徒に勝利したアストゥリアス王ラミロ1世 Ramiro I (在位 842-850年) が聖ヤコブにその加護を感謝し、寄進の内容を記した文書である。サンティアゴ教会の参事会員であったペドロ・マルシオ Pedro Marcio が教会の宝物室で発見し、書写したという体裁がとられているが、文書の中でラミロ1世が「全ヒスパニア Hispania (イベリア半島の旧称)」は未来永劫にわたり、毎年サンティアゴ教会に数々の貢納を行う約束をしていることから、ラミロ1世自身が作成したのではなく、ペドロ・マルシオ本人がサンティアゴ教会の財政資源確保を目的として捏造したと考えられている。この文書には、聖ヤコブが上記のような騎士の姿で戦場に現れ、ラミロ1世率いるキリスト教徒軍に味方して戦ったという記述があり、その場面を再現した像が「マタモロス」と呼ばれるようになった。その後、「マタモロス」は「レコンキスタ」の象徴として利用され、広く普及していくことになる²⁾。

「聖ヤコブ誓約」の記述は、13世紀前半にトゥイ Tuy 司教ルカス Lucas が著した『世界年代記 *Chronicon Mundi*』に採用され、またこれを原典のひとつとする『ヒスパニア事績史 *De rebus Hispaniae*』(トレド大司教ヒメネス・デ・ラダ Jiménez de Rada により13世紀前半に編纂)や、『スペイン史 *Estoria de España*』(カスティーリャ王アルフォンソ10世 Alfonso X の命で13世紀後半に編纂)においても、いくらか形を変えつつ、採用されることとなった³⁾。『スペイン史』は、後世に「それまでの作品とは違ってスペイン語で書かれ、カスティーリャ人、カタルーニャ人、ポルトガル人によって等しく標準的スペイン史として受け入れられた」⁴⁾ことを考慮すると、『世界年代記』はサンティアゴという一教会で生成された聖ヤコブ=マタモロスのイメージが王国全土に普及していく上で重要な役割を果たしたといえる。しかし、両年代記の聖ヤコブへの寄進に関する部分で「ヒスパニア」の語が見られないのは、どういうわけだろうか。

「聖ヤコブ誓約」と『世界年代記』あるいは『ヒスパニア事績史』の記述を比較・分析した研究としては、ファルケ Falque、フェルナンデス・ガリャルド Fernández Gallardo、バートン Barton の研究⁵⁾などが挙げられる。ファルケの研究では「聖ヤコブ誓約」と『世界年代記』の内容を細かく比較し、類似点の他、相違点を示しているものの、その理由の分析までに

1) 詳しくは、田辺加恵『「マタモロス聖ヤコブ」像の形成とその戦略的利用』『スペイン史研究』第30号、2016年、18-30頁を参照。

2) 同論文、27頁、注3参照。

3) Emma Falque, “El llamado *Privilegio de los votos*, fuente del *Chronicon Mundi* de Lucas de Tuy”, *Habis*, 33, 2002, p. 574; Rodrigo de Jiménez de Rada, *Historia de los hechos de España*, ed. Juan Fernández Valverde, Madrid, 1989, pp. 34-35.

4) D.W. ローマックス (林邦夫訳)『レコンキスター中世スペインの国土回復運動』刀水書房、1997年(第二版)、8頁。

5) Falque, *op. cit.*; Luis Fernando Gallardo, “Santiago matamoros en la historiografía hispanomedieval: origen y desarrollo de un mito nacional”, *Medievalismo*, núm. 15, Madrid, 2005, pp. 139-174; Simon Barton, “Marriage across frontiers: sexual mixing, power and identity in medieval Iberia”, *Journal of Medieval Iberian Studies*, Vol. 3, No. 1, March 2011, pp. 1-25; *Id.*, *Conquerors, Brides, and Concubines: Interfaith Relations and Social Power in Medieval Iberia*, Philadelphia, 2015, pp. 76-109.

は至っていない。フェルナンデス・ガリヤルドは、『世界年代記』で聖ヤコブと聖イシドルスが戦う聖人として同列視されていることを指摘し、後者に対するフェルナンド3世 Fernando III（後述）やルカスの崇敬の念にその理由を求めている。バートンの研究は特に「100人の乙女の貢納」（【資料1】【資料2】参照）に焦点をあてているが、サンティアゴ教会への寄進に関する記述が『ヒスパニア事績史』では簡略化されている点についても言及しており、それにはトレドとサンティアゴ・デ・コンポステラとの間に存在した首都司教座を巡る競合関係が影響していたと述べている。本稿ではこれらの研究を踏まえつつ、「聖ヤコブ誓約」の聖ヤコブへの寄進に関する箇所では繰り返し使用されていた「ヒスパニア」の語が、『世界年代記』で消滅した理由を探る。

なお、『世界年代記』の原本はラテン語で書かれたと考えられ、その写本は19点が残存している。うち、最古のものは13世紀の作とみられている⁶⁾。翻刻本は、1608年に『知のスペイン *Hispania Illustrata*』第4巻（アンドレアス・スコット Andreas Schott 監修）に収められたフアン・デ・マリアーノ Juan de Mariano 編のものが最初で、それ以降、2003年にエマ・ファルケ Emma Falque 監修の書⁷⁾が刊行されるまで新しい版は出現しなかった。スペイン王立歴史アカデミーは、1920年頃に二代目となる翻刻本の刊行を計画していたが実現せず、1926年にフリオ・プジョル Julio Puyol の手によるカスティーリャ語訳版のみを出版している⁸⁾。

2. 『世界年代記』について

1) 『世界年代記』の編者

『世界年代記』は、ルカス Lucas という人物によって編纂された。彼の経歴はよくわかっていないが、生まれたのはおそらく12世紀末のレオン León であったと考えられている⁹⁾。ルカスは晩年トゥイ Tuy 司教であったことから、通常 Lucas de Tuy（トゥイのルカス）と呼ばれ、また el Tudense（トゥイの人）と称されることも多い。しかし『世界年代記』の執筆を行った頃は、まだレオンのサン・イシドロ教会の助祭であった¹⁰⁾。聖イシドルス（サン・イシドロ）に対する尊崇の念は篤く、『聖イシドルスの奇跡について *De miraculis sancti Isidori*』という書も著している。同教会で28年間聖職に奉じ¹¹⁾、この間にフランス、ローマ、ギリシャ、アルメニア、コンスタンティノープル、キリキアのタルソス、ナザレ、また中東の各地を訪れ、見聞を深めたようである¹²⁾。

6) Lucae Tudensis, *Chronicon Mundi*, Corpus Christianorum: Continuatio Mediaevalis. LXXIV ed. Emma Falque, Turnhout, 2003（以下 CM）, pp. CVI-CXXXI.

7) 本稿注6に挙げた書。

8) Julio Puyol, *Crónica de España por Lucas, obispo de Tuy*, Madrid, 1926, pp. V-VI; Emma Falque, "Lucas de Tuy, Falsificador", *Antigüedad y Cristianismo. Monografías históricas sobre la Antigüedad tardía*, dir. Rafael González Fernández, XXIX, Murcia, 2012, p.194, nota 35.

9) 生年については、CM, pp. VII-VIII を参照。出身地レオンについては、カタリ派を弾劾するルカスの著書中の一節、「ローマから故郷レオンへ戻った」が根拠となっている。Lucae Tudensis episcopi, *De altera vita fideique controversiis adversus Albingensium errores*, ed. Juan de Mariana, Libri III, Ingolstadt, 1612, p. 170. ただしリネハンは、ルカスの出身地はレオン王国内ではなく、イベリア半島内ですらないと考えている。Peter Linehan, "Dates and doubts about don Lucas", *Cahiers de linguistique et de civilisation hispaniques médiévales*, No. 24, 2001, pp. 202-205.

10) 『世界年代記』序文に「彼女（＝本文中で後述するベレンゲーラ）は、不相応ながら私助祭ルカス年代記の編纂を命じた（*Ipsa enim, [...] michi Luce indigno diachono ut hoc perficerem imperavit*）」とある。CM, p. 10.

11) Joseph Manzano, *Vida, y portentosos Milagros de el glorioso San Isidro, arzobispo de Sevilla y egregio doctor, y maestro de las Españas con una breve descripción de su magnífico Templo, y Real Casa de el mismo Señor S. Isidro en la muy Noble Ciudad de León*, Salamanca, 1732, p. 277.

12) Lucae Tudensis episcopi, *op. cit.*, pp. 95-107.

ルカスは1239年にトゥイの司教に推挙され、1249年に没するまでその地位にあった。トゥイはミーニョ川の北側のほとりに位置し、ローマ時代に司教座が置かれた由緒ある町である。『アルフォンソ3世年代記 *Crónica de Alfonso III*』（9世紀末）によれば、西ゴート王ウィティザ Witiza（在位 700-710年、702年までは父エギカ Egica と共同統治）時代に宮廷も置かれた¹³⁾。8世紀初頭にイスラーム教徒の襲撃を受けて一時司教座は消滅したが、アストゥリアス王アルフォンソ1世 Alfonso I（在位 739-757年）期に「再征服」され、ガリシア王（在位 910-924年、914年以降はレオン王）オルドーニョ2世 Ordoño II 期には司教座も復興された¹⁴⁾。1143年にそれまで伯領であったポルトガルがレオン王国から独立すると、ミーニョ川が両国間の国境線となったため、トゥイの戦略的重要性が高まった。ちょうどこの頃、サンタ・マリア大聖堂は建設中で（12世紀初めに建設開始）、その聖別は1225年に行われている¹⁵⁾。このように、ルカスが司教に就任した13世紀半ばのトゥイは、要塞都市として発展を遂げる最中だった。ただ、トゥイでの司牧は決して順風満帆ではなく、司教区の経済的困窮や市会との対立が新司教を苦しめた¹⁶⁾。こうした事情が予測されだけに¹⁷⁾、トゥイ司教職の人選はレオン王国の教会世界にとって重要な案件であり、ルカスの司教就任は抜擢人事であったと言える。この人選には、彼の信仰心は言うに及ばず、サン・イシドロ教会における長年の奉職と活躍、豊富な海外経験、そしてフロレス Flórez が言うように著書の評判¹⁸⁾などが考慮されたのであろう。そのひとつが『世界年代記』であったことはまちがいない。

2) 『世界年代記』の編纂依頼者と編纂開始時期

『世界年代記』の序文で、ルカス自身が「ヒスパニアの *regina*（王妃または女王）」ベレンゲーラ Berenguela（1180-1246年）から編纂を依頼されたと述べている¹⁹⁾。ベレンゲーラは、カスティーリャ王アルフォンソ8世 Alfonso VIII（在位 1158-1214年）の娘として生まれ、1197年にレオン王アルフォンソ9世 Alfonso IX（在位 1188-1230年）に嫁いだ。それまでカスティーリャ王国とレオン王国は繰り返し衝突を起こしており、この縁組は両国間の和平を保つ目的で計画されたものであった。王妃とルカスが出会ったのは、おそらくベレンゲーラが王妃としてレオンに嫁いできたのちのことであったろう²⁰⁾。

13) *Crónica de Alfonso III*, ed. Zacarías García Villada, Madrid, 1918, pp. 58-59.

14) Lorena Torrado Gándara, “El obispado de Tuy en la Edad Media: sus iglesias románicas”, Tesis de doctorado, Universidade da Coruña, 2016, p. 15.
<http://ruc.udc.es/dspace/handle/2183/17766> (2018年1月14日最終閲覧)

15) *Ibid.*, pp. 57-58.

16) *CM*, pp. X-XI; Galindo Romeo, *Tuy en la baja edad media: siglos XII-XV*, suplemento al tomo XII de la *España Sagrada* del P. Flórez, Madrid, 1950, pp. 45-46; Torrado Gándara, *op. cit.*, p. 58.

17) 1211年に借地代や税の徴収に不満を持つ市民が司教スエイロ Sueiro に対して反乱を起こした。これは国王アルフォンソ8世（本文中で後述）の裁定により一旦鎮静化したが、1242年に再燃した。Galindo Romeo, *op. cit.*, p. 44; Torrado Gándara, *op. cit.*, p. 20.

18) Henrique Flórez, *España sagrada, teatro geográfico-histórico de la Iglesia de España: origen, divisiones y límites de todas sus provincias, antigüedad, traslaciones y estado antiguo y presente de sus sillas en todos los dominios de España y Portugal, con varias disertaciones críticas. De la iglesia de Tuy desde su origen hasta el siglo decimo sexto*, tomo XXII, Madrid, 1767, p. 126. 次の論文によれば、本稿注9や本文の中で挙げた書の他に、「隠者フアンの幻視」として知られるアッコ司教ジャック・ド・ヴィトリ Jacques de Vitry (1160/1170-1240/1244) への書簡もルカスの手による。Robert E. Lerner and Christine Morerod, “The Vision of [John, Hermit of the Asturias]: Lucas of Tuy, Apostolic Religion, and Eschatological Expectation”, *Traditio*, Vol. 61, 2006, pp. 195-214.

19) 序文の2箇所「ヒスパニアのベレンゲーラ王妃（女王）*Yspaniarum regine domine Berengarie*（に命じられた）」とある。*CM*, p. 4 y p. 10. 本稿注10も参照。ベレンゲーラの経歴については、Miriam Shadis, *Berenguela of Castile (1180-1246) and Political Women in the High Middle Ages*, New York, 2009を参照した。

20) Shadis, *ibid.*, p. 8.

しかしアルフォンソ9世とベレンゲーラの婚姻関係は長くは続かなかった。教皇インノケンティウス3世 Innocentius III（在位 1198-1216年）によって、近親結婚を理由に婚姻の無効を言い渡されたためである。国王夫妻はこの決定を撤回させようと教皇に多額の賄賂を贈ったものの、努力の甲斐なくついに離婚を余儀なくされ、1204年、ベレンゲーラはカスティーリャへ戻った。しかし、アルフォンソ9世との間に生まれた5人の子供の嫡出性は保証された。そのうちの一人が、のちにカスティーリャ・レオン王となるフェルナンド3世（カスティーリャ王：在位1217-1252年、レオン王：在位1230-1252年）であった。

ベレンゲーラがカスティーリャに帰国してから10年後の1214年に父アルフォンソ8世が亡くなり、弟エンリケ1世 Enrique I（在位1214-1217年）が後を継いだ。新王はまだ10歳であったため、母レオノール Leonor が摂政となった。しかしレオノールも夫の後を追うようにその死後24日目に亡くなったため、ベレンゲーラが摂政職に就くこととなった。1217年に弟エンリケ1世が早逝してから、同年、息子フェルナンド3世に譲位するまで、一時期ベレンゲーラはカスティーリャ女王の座にあった。フェルナンド3世がカスティーリャ王となって以降も、また同王が1230年にカスティーリャとレオンを統合してからも、ベレンゲーラは政治に関与し続けた²¹⁾。

『世界年代記』の編纂開始時期については、諸説ある。ファルケの整理によると主に3つの説があり、それぞれの説は①序文にベレンゲーラが「ヒスパニアの *regina*」と称されている²²⁾ことから、彼女がレオン王妃の座にあった1197年から1204年までの間に作成された、②1197年以降、ベレンゲーラがカスティーリャの摂政ならびに女王の地位にあった1217年までの間に作成された、③フェルナンド3世がカスティーリャ、レオンの両王国を統一し、王太后という意味で *regina* の称号を獲得した1230年頃に年代記の制作をルカスに依頼した²³⁾、と主張する。ファルケ自身の説は3番目の説に同調するものであり、本稿の筆者も「ヒスパニアの」というイベリア半島全土を潜在的に示す地名を冠したベレンゲーラの呼称に注目し、これを支持したい。

3) 『世界年代記』の内容と編纂の意図

『世界年代記』は4巻から成り、天地創造に始まって、1236年で終わっている。天地創造から物語を始め、西ゴート時代を経て執筆時現在に至るまでの出来事を綴っていくというスタイルは、中世の年代記では珍しくない。たとえば、ルカスが傾倒したセビーリャ Sevilla の聖イシドルス Isidorus (560-636年) の『世界年代記 *Chronica mundi*』や、ヒメネス・デ・ラダの『ヒスパニア事績史』でも同じ形式が採用されている。そこには国王の正統性や王国・民族の存在意義を歴史的に誇示する意図があった²⁴⁾。上記4つの巻で扱われている内容は、それぞれ、＜第1巻＞天地創造から西ゴート王スウィンティラ Suintila（在位621-631年）まで、＜第2巻＞聖イシドルスの著作（主にいくつかの小年代記）からの引用、＜第3巻＞西ゴート王国の歴史、＜第4巻＞アストゥリアス王国の建国者ペラヨ Pelayo（在位718-737年）からフェルナンド3世によるコルドバ Córdoba 征服（1236年）までとなっていて、「聖ヤコブ誓約」の内容が含まれているのは第4巻である。第1巻の主要原典のひとつが聖イシドルスの『世界年代記』であるこ

21) 『世界年代記』には、「フェルナンド3世はまるで意志の弱い子供のように母親の言いなりであった」とある。CM, p. 332 y pp. 339-340.

22) 本稿注19参照。

23) CM, pp. XVIII-XIX. 実際、ルカスは『世界年代記』本文において、王太后となったベレンゲーラも *regina* と呼んでいる。

24) Esteban Sarasa Sánchez, “La construcción de una memoria de identidad. El género historiográfico en la Edad Media: de lo europeo a lo hispano”, *Los espacios de poder en la España medieval*, Logroño, 2002, p. 421.

とから、これとルカスの『世界年代記』との継続性は明らかであり²⁵⁾、第2巻に聖イシドルスの他の年代記が収められたのも、ルカスが聖イシドルスの著作を重視していたからに他ならない。

ルカス自身が「聖イシドルスやその他ヒスパニアの歴代国王の歴史について著述した賢人たちによる諸年代記」を編纂したと序文で述べている²⁶⁾ように、『世界年代記』の編纂には聖イシドルスの著作以外にも様々な年代記が原典として使用された。第4巻では、『アルフォンソ3世年代記』、『サンビーロ年代記 *Crónica de Sampiro*』(11世紀)、『シロス史 *Hisotria Silense*』(12世紀)、『オビエド司教ペラヨの年代記 *Crónica del obispo Pelayo de Oviedo*』(12世紀)などを原典としていることが判明しており²⁷⁾、ライリー Reilly の検証²⁸⁾によって「聖ヤコブ誓約」もそのひとつであったことが確認されている。

『世界年代記』の編纂の目的は、その序文によると「これを読む者たちがその内容から学習し、よき君主となるよう」²⁹⁾ 彼らを導くこと、すなわち後世の君主が統治を行う際に指針となるものを作成することにあった。もっとも、年代記は君主だけが読むことを想定して編纂されたわけではなく、それが主張する王国の重要性や正統性がピラミッド形社会の上層部にまず認識され、次いでより下の階層へと広く伝播されていくことが期待されたにちがいない。またライリーやシャディスは、『世界年代記』の編纂にはカスティーリャ、レオン両王国の統合を堅固なものにする目的があったと考えている³⁰⁾。

いずれにしても、前述の通り、バレンゲーラがカスティーリャ・レオンを再統合した国王の母すなわち王太后として編纂を依頼したのであれば、『世界年代記』はのちの『ヒスパニア事蹟史』、『スペイン史』に先立ち、国史・正史とすることを意識して作成された年代記であったと位置づけることができる³¹⁾。

3. 「聖ヤコブ誓約」と『世界年代記』の比較

まず、「聖ヤコブ誓約」と『世界年代記』の最も大きな違いとして、文体の違いが挙げられる。「聖ヤコブ誓約」(【資料1】参照)の方は国王ラミロ1世が自身の口で語りかける一人称の形式をとっているのに対し、『世界年代記』(【資料2】参照)の方は三人称の形式がとられている。前者が一人称を採用している理由は、ラミロ1世自身が作成したという文書の真正性を印象づけるためであろうと推測されるが、「余」を主語とする細かな内面描写を連ねることで、出来事を劇的に、あるいは感動的なまでに演出している。また語り手を一人称とすることにより、文章に緊張感・臨場感が生まれ、読み手・聴衆(中世の文書はしばしば民衆に読み聞かせられたことを想起したい)にラミロ1世との一体感・連帯感を持たせ、共感を呼び起こさせる効果も与えている。

一方、『世界年代記』の方は諸年代記の集成であり、編年体という文章の性格上、三人称で書き換えざるをえなかった。その場合、語り手は物語の世界の外側に位置することとなり、必

25) *CM*, p. XXXIII-XXXV.

26) *Ibid.*, p. 4.

27) *Ibid.*, pp. XXXIII-CV; Juan A. Estévez Sola, "Fuentes menores del *Chronicon mundi* de Lucas de Tuy y un apéndice de Perdo Coméstor", *Traditio*, vol. 61, 2006, pp. 167-193.

28) Bernard F. Reilly, "Sources of the Fourth Book of Lucas de Tuy's *Chronicon mundi*", *Classical Folia*, 30, 1976, pp. 127-137.

29) *CM*, p. 4.

30) Bernard F. Reilly, "Bishop Lucas of Tuy and the Latin Chronicle Tradition in Iberia", *Catholic Historical Review*, vol. 93, No. 4, 2007, pp. 771-772; Shadis, *op. cit.*, p. 8.

31) *CM*, p. XVIII.

然的に淡々とした語り口となるが（下表はその一例）、聖ヤコブ出現は他の「実際にあった」エピソード群の間に挿入され、それらと同列に扱われることで、逆説的に真実味を深め、客観的事実へと変容した。

聖ヤコブ誓約	世界年代記
罪悪感に苛まれ、思い出すたびに涙が出るが、我々の側には大勢の戦死者が出た。生き残った者も負傷し、疲弊しきって逃遁し、混乱のうちにクラビホと呼ばれる丘までたどり着いた ³²⁾ 。	ラミロ王の軍は少しずつ退却を余儀なくされ、クラビホと呼ばれる山までやって来た ³³⁾ 。
余、ラミロ王はキリスト教徒たちが直面している危機に考えをめぐらし、不安になりながらも眠りに落ちた。するとそのとき、ヒスパニアの民の守護聖人である聖ヤコブが、私の目の前に肉体を伴って出現してくださったのである ³⁴⁾ 。	ラミロ王が眠りに落ちたそのとき、使徒聖ヤコブが現れた ³⁵⁾ 。
突如この驚くべき幻視から目覚めると、余は涙でむせび、心臓を高鳴らせながら、呼び集めた大司教、司教、その他の聖職者たちにこのことを話した ³⁶⁾ 。	ラミロ王は我に返り、司教や修道院長を呼んで、幻視を話した ³⁷⁾ 。
そのとき、約束通り神の使徒が現れ、両者の戦意を煽りつつも、確かに我々の側に味方し、イスラーム教徒の大軍団に対してはその行く手を遮ったり敗走させたりした ³⁸⁾ 。	そのとき約束通り聖ヤコブが現れ、戦場でキリスト教徒たちを鼓舞し、イスラーム教徒たちには重傷を負わせた ³⁹⁾ 。

内容に関しては、貢納としてイスラーム教徒から要求された100人の乙女の記述の相違が目を引く。「サンティアゴ誓約」の方では単に「貴族の乙女50人、平民の乙女50人」であったのが、『世界年代記』では「花嫁にするための貴族の乙女50人と、イスラーム教徒の慰み者にするための平民の乙女50人」と脚色されている。「サンティアゴ誓約」に比べ、『世界年代記』では全体的に文章が簡潔化されているにも拘らず、ルカスがここで加筆を行った理由は不明である。しかし、100人の乙女たちの悲しい運命を加えることにより、イスラーム教徒の残虐性を示し、これに立ち向かうキリスト教徒には勇敢さと正当性を付与しようとした可能性はあろう。その場合、100人の乙女の貢納という悪弊を断ち切るために戦って苦境に陥ったキリスト教徒を救う聖ヤコブは、悪を排除し善を擁護する正義の騎士、すなわち *miles Christi* として一層印象づけられる⁴⁰⁾。

聖ヤコブが決戦前夜にラミロ1世の前に現れる場面、翌日戦場に約束した通りの騎馬姿で現れる場面、またラミロ1世が約束した貢納の内容については、2つの史料にほぼ差はない⁴¹⁾。

32) Barton, *Conquerors*, pp. 156-157.

33) *CM*, p. 238.

34) Barton, *Conquerors*, pp. 156-157.

35) *CM*, p. 238.

36) Barton, *Conquerors*, pp. 156-157.

37) *CM*, p. 239.

38) Barton, *Conquerors*, pp. 158-159.

39) *CM*, p. 239.

40) ただし、この100人の乙女に関する部分は『ヒスパニア事蹟史』には採用されなかった（【資料3】参照）。聖ヤコブの騎士性については、田辺、前掲論文、pp. 22-25を参照。

41) Falque, "El llamado...", pp. 575-576.

ただ大きく異なるのは、「聖ヤコブ誓約」で繰り返し使用された「ヒスパニア」という文句が、『世界年代記』ではほぼすべて削除されている⁴²⁾ ことである。上に挙げた例でも、「聖ヤコブ誓約」では「ヒスパニアの民の守護聖人である聖ヤコブ」と表現されているのに対し、『世界年代記』の方では「使徒聖ヤコブ」とだけ記されているのが確認できる。「ヒスパニア」の語の有無について、特に顕著なのは、ラミロ1世が約束する聖ヤコブへの貢納品についての記述部分である。

聖ヤコブ誓約	世界年代記
全ヒスパニアならびに使徒聖ヤコブの名のもとに神がイスラーム教徒から救い出してくださるヒスパニアの民たちの全地域について、以下のことを定め、誓約する ⁴³⁾ 。	聖ヤコブの名のもとに神がイスラーム教徒の手から解放すべしとして征服した地、ならびにこれから征服するであろう地について、以下のことを定める ⁴⁴⁾ 。
全ヒスパニアのキリスト教徒は、イスラーム教徒に対して遠征を行うたびに、得た戦利品の中から一騎士の割り前相当分を栄えある我らの守護聖人でありヒスパニアの保護者である聖ヤコブに奉納する ⁴⁵⁾ 。	キリスト教徒の騎士たちは、対イスラーム教徒との戦いで得た戦利品の中から一騎士の割り前相当分を聖ヤコブに与える ⁴⁶⁾ 。

「聖ヤコブ誓約」は、聖ヤコブの遺骸が眠るサンティアゴ教会の権威をイベリア半島のキリスト教世界全体に知らしめ、同教会の収入を拡大する目的のために作成された。そのため、現時点ではイスラーム教徒の支配下にあるが、かつてはキリスト教徒が有し、今後後者によって奪回されていくべき地⁴⁷⁾ も含め、潜在的にイベリア半島全土を意味する「ヒスパニア」の語が再三用いられている。しかし、『世界年代記』で聖ヤコブが「ヒスパニア」の地名と直接結びつけて用いられている箇所は、前述のイエスから布教と庇護を委ねられた土地に関する部分以外に見当たらない。聖ヤコブは「使徒 (*apostolus*)」「聖なる (*sanctus*)」「至福を受けし (*beatus*)」という冠辞とともに語られるのみである。一方、聖イシドルスの方は、しばしば「ヒスパニアの博士」「ヒスパニアの大司教」という語で冠される⁴⁸⁾。つまり、ルカスにとって、「ヒスパニア」と結びつけられるべきは、聖ヤコブではなく、敬愛してやまないセビーリヤ大司教聖イシドルスの方であった。

ジャン＝マリー・ギラルデル Jean-Marie Guirardel の研究⁴⁹⁾ によれば、聖イシドルスの重要性が強調されている『世界年代記』と比べ、これを原典のひとつとする『ヒスパニア事蹟史』では明らかに同聖人の聖性が軽減されている。『ヒスパニア事蹟史』の編纂者であるトレド司教ヒメネス・デ・ラダがこのセビーリヤの聖人を意図的に関心の対象から外した背景には、サンティアゴ・デ・コンポステラ、トレド、セビーリヤの大司教座間にヒスパニアの首座をめぐる競

42) *Ibid.*, p. 576.

43) Barton, *Conquerors*, pp. 158-159.

44) *CM*, p. 239.

45) Barton, *Conquerors*, pp. 158-159.

46) *CM*, pp. 239-240.

47) 「聖ヤコブ誓約」(【資料1】参照)に、「全ヒスパニアならびに使徒聖ヤコブの名のもとに神がイスラーム教徒から救い出してくださるヒスパニアの民たちの全地域 *totam Hispaniam, uniuersis Hispaniarum partibus, quascumque Deus sub apostoli Iacobi nomine dignaretur a Sarracenis liberare*」とある。

48) たとえば, *CM*, p. 122 (*beati Ysidori Yspaniarum doctoris archiepiscopi Yspalensis*), *id.*, p. 216 (*Ysidoro Yspalensi episcopo Yspaniarum primati*), *id.*, p. 219 (*beattissimi doctoris Yspaniarum Ysidori*) など。

49) Stéphanie Jean-Marie Guirardel, "Formas y funciones de lo maravilloso hagiográfico en la *Historia de rebus Hispaniae*: el caso de san Isidoro", 2008.
<https://hal.archives-ouvertes.fr/halshs-00093553/document> (2018年1月14日最終閲覧)

合関係の存在があった⁵⁰⁾。聖イシドルスこそヒスパニアを代表する聖人であるとみなしていたルカスが、聖ヤコブからヒスパニアの守護聖人としての役割を剥奪しないまでも、それを意識的に薄めようとしたとき、そこには政治的／宗教的動機という差はあれ、ヒメネス・デ・ラダと共通する心理が働いていたといえよう。

4. まとめとして

「マタモロス聖ヤコブ」は、サンティアゴ教会への未来永劫にわたる貢納を保証した「聖ヤコブ誓約」を成立させるために考案された舞台設定のひとつであった。そこでは *miles Christi* という聖ヤコブの騎士性が利用された。

「聖ヤコブ誓約」が『世界年代記』に組み込まれるにあたり、その騎士性、つまり、悪しきイスラーム教徒を討伐する善良なるキリスト教徒の庇護者という面が一層強調されるようになった。しかし、一方で聖ヤコブのヒスパニアの守護聖人としての性格は薄められ、聖イシドルスがその地位にとって代わる。これには編纂者であるルカスの宗教心が強く反映されている。

その後、対異教徒の象徴としての聖ヤコブのイメージは確実に王国内に普及し、造形表現としての「マタモロス」像も「レコンキスタ」や「新大陸」における征服活動を正当化する中で多用されていくことになる。17世紀の守護聖人をめぐる論争に巻き込まれながらも、聖ヤコブはヒスパニアの守護聖人としての地位を保持していくのであるが、その経緯については今後の研究課題としたい。

【資料1】「聖ヤコブ誓約」⁵¹⁾

父と子と聖霊の御名において。アーメン。先祖の偉業は、黙して語らないままにしておくべきではない。後を継ぐ者たちが、そのすばらしき業績によって学ぶことができるのであるから。いやむしろ、それらは文字に残しておくべきであろう。そうすれば、彼らの思い出とともに生き永ええ、良き前例として後の世代に模倣されるところとなるであろう。

このような理由から、余、ラミロ王と、神が余に与えた妻、ウラカ王妃ならびに我らの息子オルドーニョ王と我が弟ガルシア王は、神のもっとも栄光ある使徒ヤコブに我々が捧げた贈り物の内容を、ヒスパニアの大司教、司教、修道院長、貴族、すべてのキリスト教徒の同意を得て、ここに記す。我々の継承者たちは、我々が成したことを不知を理由に反故にしてはならない。むしろ、我らの業績を思い起こし、それを模範とすべきである。また、この寄進を行うに至った経緯も、後の世代が引き継いでいくよう、ここに記しておく。

ロドリゴ王の治世にイスラーム教徒によってヒスパニアが破壊されて以来、キリスト教徒の側には無気力、怠惰、怠慢かつ無能な王が続いた。いかなる信徒も決してその生き方を真似すべきではない。語るにも値しないこれらの王は、貴族の乙女50人、平民の乙女50人から成る、麗しき女性100人を毎年イスラーム教徒に貢納していた。これによって、イスラーム教徒からの攻撃を回避するためである。なんとという屈辱であろうか！ まったくもって末代までの

50) *Ibid.*, pp. 18-21. ヒメネス・デ・ラダの聖ヤコブに対する「冷遇」は、先述のパートンの研究（本稿注5参照）や次のローマックスの論文で指摘されている通りである。

Derek W. Lomax, "Rodrigo Jiménez de Rada como historiador", *Actas del Quinto Congreso de la Asociación Internacional de Hispanistas (II), celebrado en Bordeaux del 2 al 8 de septiembre de 1974*, dir. Maxime Chevalier, François López, Joseph Pérez y Noel Salomón, Bordeaux, 1977, p. 590.

https://cvc.cervantes.es/literatura/aih/pdf/05/aih_05_2_017.pdf (2018年1月14日最終閲覧)

51) Barton, *Conquerors*, pp. 153-159.

恥である。一時的でいつ破られるとも知れない和約とのひきかえに、キリスト教徒が捕えられ、イスラーム教徒の慾望の餌食とされることをよしとしていたのである。

前述の王たちの後継者である余は、神の恩寵により王座に就いたときから、神のおぼしめしを受け、我が民にとって恥すべきこのような貢納を打ち切ることを第一義としていた。この有意義な目標を実現するために、まずは大司教、司教、修道院長、その他の聖職者たちに、そして次に王国の全貴族に計画を告げた。慎重かつ道義にかなう審議を終え、民に向け、王国全土で遵守されるべき法とフエロをレオンで発布した。また王国の全貴族に対して大号令をかけ、貴族・平民、騎士・歩兵にかかわらず、強靱で戦争準備の整っている者たち全てを王国全土から召集し、定めた日に彼らを連れて参集するよう命じた。また大司教、司教、修道院長、その他の聖職者たちにも遠征に同行し、神のご慈悲によって我らの力が増すよう、祈禱してほしいと依頼した。

このようにして我が指令は実行され、虚弱で戦闘能力に欠ける者たちだけを田畑の耕作にあたらせるため後に残し、それ以外の者は参集した。中には我が指令によらず、神の愛に導かれて自発的に参加した者もあった。我が軍は少数ではあったが、多数であることよりも、神の恩寵の方が頼りになると信じ、近隣の土地を越え、ナヘラに向かって進軍し、そこからアルベルダと呼ばれるところまで来た。イスラーム教徒たちは斥候により我々の接近を把握しており、半島内の全イスラーム教徒を集結させていた。そのみならず、海の向こうに住むイスラーム教徒をも書簡や使者を通じて召集していて、大軍をもって我々を猛撃してきた。結果は、何をか言わんやである。罪悪感に苛まれ、思い出すたびに涙が出るが、我々の側には大勢の戦死者が出た。生き残った者も負傷し、疲弊しきって逃遁し、混乱のうちにクラビホと呼ばれる丘までたどり着いた。岩山の上でひとかたまりになり、翌日はどうすればよいのか全くわからないまま、嗚咽と祈りのうちにその夜を明かした。

余、ラミロ王はキリスト教徒たちが直面している危機に考えをめぐらし、不安になりながらも眠りに落ちた。するとそのとき、ヒスパニアの民の守護聖人である聖ヤコブが、余の目の前に肉体を伴って出現してくださったのである。余は今自分が実際に目にしていることに大変驚き、貴殿は何者かと問うたところ、神の使徒ヤコブであるとお答えになった。余がこの言葉に驚愕していると、聖ヤコブはこう述べられた。「我が主、イエス・キリストは我が兄弟である他の使徒たちを世界の各地方へお遣わしになったが、私にはヒスパニア全土を委ねられ、それを私の庇護下に置くよう定められたのを知らなかったか」。そして余の手を取って、こう続けられた。「さあ元気を出して勇気を持つのだ。私が助けに参ろう。そして明日、汝は神の力を得て、汝を包囲しているイスラームのあの軍を打ち負かすだろう。しかしまもなくキリストの名のもとに戦う汝の兵士たちについては、その多くが永遠の休息につき、殉死者の冠をいただくことになる。汝らもイスラーム教徒たちも、私が常に白い服をまとい、白馬にまたがり、手に白い旗を掲げて現れるのを必ずや目にするであろう。夜が明ける直前に罪を懺悔して許しの秘跡を受け、ミサを行って聖体拝領を行ったら、神と私の名を唱えながら、恐れずにイスラーム教徒たちの戦列に攻撃を加えよ。敵は必ずや汝の刃にかかって滅び去る」。これだけ言うと、神の使徒のありがたいお姿は余の目の前から消えた。

突如この驚くべき幻視から目覚めると、余は涙でむせび、心臓を高鳴らせながら、呼び集めた大司教、司教、その他の聖職者たちにこのことを話した。彼らは驚くべきこの慰めに対し、神と使徒に感謝の祈りを捧げると、余が与えられた指示を急ぎ実行した。かくして我々は武装し、戦線を整えて、イスラーム教徒との戦いに突入した。そのとき、約束通り神の使徒が現れ、両者の戦意を煽りつつも、確かに我々の側に味方し、イスラーム教徒の大軍団に対してはその行く手を遮ったり敗走させたりした。

この状況を目にして、我々は使徒が約束を守ってくださったことを理解し、眼前のすばらしい光景にたいそう喜んで、心の底から湧き上がる大声で神と使徒の名前を呼んだ。「神よ、我々を助けたまえ。聖ヤコブよ」。このような祈りがヒスパニアでなされたのは、このときが初めてであった。その祈りは神の恩寵により聞き入れられた。その日、7万人ものイスラーム教徒たちが戦場で死んだのである。その後我々は敵の要塞を破壊し、カラオラの町を占領して、これをキリスト教徒の支配下に置いた。

使徒の起こしてくださった奇跡によって思いがけなく勝利を得たことを想起し、我らの守護聖人であり庇護者である聖ヤコブに、今後永久に何らかの贈り物をしていくことを決めた。そこで、全ヒスパニアならびに使徒聖ヤコブの名のもとに神がイスラーム教徒から救い出してくださるヒスパニアの民たちの全地域について、以下のことを定め、誓約する。すなわち、2頭立ての牛が一日で耕作可能な面積の畑から収穫される穀物のうち最上等のものならびに同様の畑から作られる葡萄酒を聖ヤコブの教会に住まう参事会員と聖職者に対し、毎年初穂料として未来永劫奉納する。また、全ヒスパニアのキリスト教徒は、イスラーム教徒に対して遠征を行うたびに、得た戦利品の中から一騎士の割り前相当分を栄えある我らの守護聖人でありヒスパニアの保護者である聖ヤコブに奉納することも承認し、永久に確約する。

我々、ヒスパニアの全キリスト教徒は、上記の寄進、奉納、供物すべてを毎年聖ヤコブの教会に贈ることを誓約した。そしてこれは我々ならびに我々の子孫も永久に守るべきであると、教会法に則って定めた。よって、全能なる父であり永遠なる神よ、憚りながら切にお願い申し上げます。主よ、どうか聖ヤコブの功德に免じて我らの不義を忘れ、我らにご慈悲をお与えください。また主および聖ヤコブのお力添えによって我々ならびに我々の子孫代々が自身のために手に入れることができたもののうち、主に敬意を表して聖ヤコブに献じたものはすべて、我らの魂をなくさめてくれますように。そして、主のおとりはからいにより、三位一体の主が住まい、統治される永遠の棲家へ、主が選ばれた者たちと共に我々も入ることをお許しになりますように。アーメン。

【資料2】ルカス『世界年代記』⁵²⁾

第4巻、第17章（途中より）：

ラミロ王が王位に就くと、かつてマウレガト王がしていたように、花嫁にするための貴族の乙女50人と、イスラーム教徒の慰み者にするための平民の乙女50人を毎年貢納するよう、イスラーム教徒たちが要求してきた。ラミロ王は、乙女たちを辱めようとするこの行為に激怒し、大軍を率いてイスラーム教徒たちの地に入った。道々目にしたもの、村や田畑で目にしたものすべてを鉄と炎で破壊し尽くしながら、ナヘラまで進んだ。一方イスラーム教徒たちの方も大軍を率いて到着しており、アルベルダと呼ばれる場所で両者は衝突した。ラミロ王の軍は少しずつ退却を余儀なくされ、クラビホと呼ばれる山までやって来た。夜の帳が下り、キリスト教徒たちは涙と祈りのうちに夜を過ごした。ラミロ王が眠りに落ちたそのとき、使徒聖ヤコブが現れ、彼に言った。「我が主、イエス・キリストは我が兄弟の使徒たちに他の地方を分け与えたが、我には全ヒスパニアを委ね、それを私の庇護のもとに置かれた」。聖ヤコブは王に手を置き、続けてこう言った。「さあ元気を出してしっかりするのだ。汝を助けに来たのは、キリストの使徒である我ヤコブである。そなたは明日、神の助けを得て、ここを包囲している無数のイスラーム教徒たちを打ち負かすであろう。長い休息に値する汝の軍の多くはこの戦いで殉死の冠を授かるであろう。このことを疑うな。明日汝は私が白い旗を持ち、白い馬に乗って現れるのを目にす

52) Puyol, *op. cit.*, pp. 290-293; CM, pp. 238-240.

るであろう。朝になって罪を懺悔し、聖体拝領を行ったら、武器を持って主と私の名を唱えながらイスラーム教徒の軍に攻撃せよ。敵は必ずや汝の刃にかかって滅び去る」。このように言う
と、使徒の姿は消えた。ラミロ王は我に返り、司教や修道院長を呼んで幻視を話し、これらの
者たちは神に感謝をして命じられたように行い、異教徒たちに戦いを仕掛けた。そのとき約束
通り聖ヤコブが現れ、戦場でキリスト教徒たちを鼓舞し、イスラーム教徒たちには重傷を負わ
せた。キリスト教徒たちは聖ヤコブを目にすると神の援助を覚えて勇み立ち、大声をあげてイ
スラーム教徒たちに斬りつけていった。そしてこう言った。「神よ、我々を助けたまえ。聖ヤコ
ブよ」。そのとき敗北したイスラーム教徒たちは逃亡を始め、死者も7万人ほどあった。それか
らラミロ王はカラオラとその他いくつかの場所や城を征服し、大きな勝利を上げた。

第4巻、第18章（途中まで）：

ラミロ王は、大司教たち、司教たち、修道院長たちとともに、聖ヤコブの名のもとに神がイ
スラーム教徒の手から解放すべしとして征服した地、ならびにこれから征服するであろう地に
ついて、以下のことを定める。すなわち、今後永久、一對の牛が一日で耕作できる面積から収
穫される穀物と葡萄酒を初穂料として、毎年、聖ヤコブの教会で神に仕える聖職者たちのため
に貢納する。またキリスト教徒の騎士たちは、対イスラーム教徒との戦いで得た戦利品の中か
ら一騎士の割り前相当分を聖ヤコブに与える。〔中略〕その後、イスラーム教徒たちは乙女の
貢納をキリスト教たちに要求しようとは決してしなかった。なぜならラミロ王が使徒聖ヤコブ
の助けに励まされ、勇敢な手でイスラーム教徒たちと戦ったからである。

【資料3】ヒメネス・デ・ラダ『ヒスパニア事蹟史』⁵³⁾

第4巻、第13章（途中から）：

これらのこと⁵⁴⁾を終えたのち、ラミロ王は神への奉仕をしないままではいたくはないと思い、
アラブ人たちの領土を襲撃し、村であれ畑であれ、道々目に入ったものをことごとく燃やし
た。ナヘラもまた同様である。そのときサラセン人たちの無数の軍隊が彼の前に立ちはだかつ
た。ラミロの軍隊はそれを遠くに認めると、クラビホと呼ばれる要塞の地まで退却した。夜、
ラミロが決戦を交えるべきか決めかねて歩いていると、聖ヤコブが現れ、翌日は勝利を信じ
て戦いに挑むよう励ました。朝が明けると、国王は彼の見た幻視を司教たちや大貴族らに伝え
た。彼らはその幻視に感謝し、聖ヤコブの約束に励まされ、協力して戦いの準備にとりかかっ
た。しかし敵方も兵の数が大幅に上回っているのに自信を得て、反対の方から戦場に出てき
た。このようにして戦いが各所で始まった。サラセン人たちは混乱のために動揺し、キリスト
教徒の剣に背を向けた。こうしてイスラーム教徒のうち7万人が命を落とした。話によれば、
聖ヤコブが白馬にまたがり、白い旗をはためかせながら、戦場に現れたということである。そ
れからラミロ王はアルベルダ、クラビホ、カラオラ、その他の場所を手中におさめ、王国に加
えた。その日以来、「神よ、助けたまえ。聖ヤコブよ」という祈願のことがばが使われるよう
になったという。またそのとき彼らは聖ヤコブに対し、奉納物や贈り物を捧げた。またいくつ
かの場所では、災難や貧困に苛まれてというのではなく、自発的な崇敬から今もそれらをおさめ
続けているところがある。

53) Rodrigo Jiménez de Rada, *Historia de los hechos de España*, ed. Juan Fernández Valverde, Madrid, 1989, p. 177.

54) 王位を篡奪しようとしたネボシアノを捕らえて目をくり抜いて修道院に幽閉、ガリシアを襲ったノルマン人を撃破、謀反を起こした貴族の処罰のことである。Jiménez de Rada, *op. cit.*, pp. 176-177.